

扁平上皮がんのある高齢犬に ファイア抽出「糖鎖TPG-1」を与えた一例



症例提供

中尾 奨吾先生

上本町どうぶつ病院

症例について

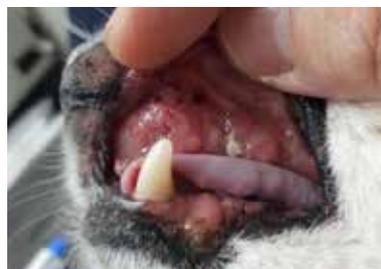
症例は初診時13歳避妊済みメスのスピッツです。2020年12月に左上顎の犬歯周囲に腫脹が認められはじめました。翌年4月に、口腔内の出血、鼻汁、くしゃみを主訴に受診、左上顎に腫瘤が見つかり、病理検査で扁平上皮がんとなった症例です。当院へは診断後からセカンドオピニオンにて来院されました。

経過と結果

口腔内の腫瘍部分は膨隆し糜爛を呈し、左鼻梁部(歯肉に腫瘍が認められる直上)には痂皮・脱毛があり、腫瘍が鼻まで浸潤していると推測されました。血液検査に顕著な異常所見は認められなかったため、分子標的薬とNセイドのメトロニック療法、制酸薬、そしてファイア糖鎖TPG-1も同時に開始しました。写真は、抗がん剤を始めた5/8、三週間後の5/29、さらに2週間後の6/12のものですが、表面の潰瘍や出血などが収まりいびつな形であったものが平坦に近い状態にまでなりました。鼻梁部の出血があったためオルビフロキサシン(ビクタス)を追加で処方しています。5月末にファイア糖鎖TPG-1を切らしてから食欲が少しずつ低下し、食欲増進のため6/12ファイア糖鎖TPG-1を再開。7月には飼い主が、内服薬のために食欲が落ちていることを懸念したため抗がん剤をやめました。その後、病状は一進一退しながらですが、食欲を最優先とされ薬を飲めないときもファイア糖鎖TPG-1だけは使用し続け、最期は2022年1/24に亡くなりました。

考察と感想

ファイア糖鎖TPG-1が、腫瘍を縮小したというよりも、食欲維持や免疫力の向上に役立ったという印象です。2週間で赤みが引いて食欲の改善、QOLが向上したのには驚きました。

2021年
5月8日2021年
5月29日2021年
6月12日

- 2020年12月 左上顎犬歯周囲の歯肉に腫脹
- 2021年4月 口腔内出血、鼻汁、くしゃみ
左上顎の腫瘤の細胞診実施
病理検査より扁平上皮がん診断
- 5月8日 腫瘍部分は糜爛を呈し、左鼻梁部にも痂皮・脱毛あり
血液検査に異常所見なし
トセラニブ・ピロキシカムのメトロニック療法、
ミノプロストール、ファイア糖鎖TPG-1開始
- 5月26日 ファイア糖鎖TPG-1飲みきり
- 6月12日 食欲低下、体重減少。ファイア糖鎖TPG-1処方
- 7月4日 食欲激減、抗がん剤の内服を休止。
- 7月31日 内服薬は全て停止、
ファイア糖鎖TPG-1のみ継続し食欲が回復
- 2022年1月24日 永眠